

2018年1月末、高山正之氏が、突然「日本なかりせば」を週刊新潮の変見自在に書いておられた。先日書いたところだったので、びっくりしたのだが、マレーシアのマハティールの話である。なぜマハティールが「日本なかりせば」演説をしたか、よくわかる。ほぼそのまま引用する。

マハティールが政界に出たころのマレーシアは酷いものだった。

国土のいいところは大方が英国人所有で、民の多くは支那人が持ち込んだ阿片の中毒にかかっていた。

彼は12万もの中毒患者を施設に入れ、麻薬売買は死刑とする法律をつくって民から麻薬を抜いた。

首相になると毎年、国家予算の半分を使って英国人所有の土地を買い戻した。

植民地時代の負の遺産はまだあった。阿片売買で太った支那人たちだ。彼らは独立後も居座り、リー・クアンユーは本気でマレーシアの支配者になる気だった。

彼らをどう退治するか。

例えばその10年後に南北統一を果たしたベトナムは支那人がため込んだ資産を片端から没収していった。彼らはカネが命だから船で国外脱出を図った。世に言うポートピープルがそれだ。

マハティールはベトナム人よりは情が厚かった。マレー人の国だから支那人を二級市民とするブミプトラ政策をとり、それを嫌って出ていく者のためにシンガポールを与えた。

リー・クアンユーは、1965年8月、泣きながら華人島の独立を宣言したが、それはマハティールの恩情に涙したのではなく、マレー全体を取りそこなった悔し涙だった。

負の遺産を除去したマハティールはそこでルックイースト（Look East）、つまり日本を見習って工業化政策をとった。

90年代には工業製品の輸出総額が天然ゴムなど一次産品の倍にも達した。インテルはアジアの拠点にここを選んでいるほどだ。

この成果を踏まえて彼は92年、香港で開かれた欧州東アジア経済フォーラムで講演した。

「欧米は」と彼は切り出した。「独伊の復興は応援したが、日本を含むアジア諸国の成長は抑え込んだ」

しかし「日本はその高い技術で貧者も金持ちも快適に暮らせる社会の建設に力を注ぎ、まるで魔法を使ったような成果を上げた」。

「もし日本なかりせば、欧米が世界の工業を独占し」……以下すでに書いた。

「東アジアの国でも立派にやっていけることを証明したのは日本だった。そして我々は日本人を模範として、自分たちも驚くような成功を遂げた」……………

講演のさなかに「白人たちは席を蹴立てて出て行った」と後に朝日新聞主筆になる船橋洋一はずっとあとに書いている。筆致は、「アジアの小国のくせに白人を怒らせてどうするんだ」というトーンだった。朝日新聞は、中韓のみならず、白人にもコンプレックスをもっているのか？

この講演に前後してマハティールは日本を中心に据えた「東アジア経済協力会議 (EAEC)」の立ち上げを世界に問うている。

クリントンは日本の再興など許せないと APEC を使い、EAEC 潰しにでた。日本は尻尾を振って米国についていった。マハティールは落胆した。(註：日本の外交官が、マハティールを無視してよかった、などと戯けたことを言ったときである。)

そのあと村山富市が訪ねてきて「日本軍が悪いことをした」とバカを言った。日本あってのアジアと思ってきたマハティールはこんな首相を見て、起ちあがれないほどの衝撃を受けた。

アメリカの陰謀により、股肱の臣を次々に失脚させられ、……………これは覚悟の上だった。

追い打ちをかけるようにジョージ・ソロスがアジア通貨危機を演出し、マレーシアを痛めつけた。彼は失意の内に政界を去った。

それから 15 年。彼は日本がもはや村山トン吉や朝日新聞が大きな顔をする時代ではなくなったのを知った。(余談だが、村山トン吉が回顧録か回想録を著した。こんなもん、だれが読むねん)

マハティールは EAEC を思い立ったころ心に描いた日本が戻ってきたように見えた。

彼は今 92 歳だが、再び首相に返り咲く決意を固めたと新聞が伝えた。

下馬評ではその可能性は高いらしい。もし返り咲いたら、まず日本の首相に会いに来るだろう。(安倍晋三だから) きっと失望はしないはずだ。

2018.02.15.